
MOON-4 夜叉 4 < 2 8 >

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 4 <28>

【Zコード】

N3136N

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

2人を結びつけたのは、何かの因縁か。それとも、奇跡なのか。いるはずのないもう一人の帝王 九桜の姿を秀は桜の中に見た - - -

MOONシリーズ 第4弾 夜叉4 第1章4話目です。

1. 月夜(がつや) - 4 (前書き)

『WOLF MEET VAMPIRE』を読まれた方はもうおわ
かりですね。

新宿の何処かにある桜の洋館で。

2階のバルコニーから見上げる空も青く澄んでいた。

秀は、桜の元へ訪れた。

桜は白いドレス姿で藤椅子に座り、その膝の上には薔薇の花が沢山置かれていた。

全て、この家で取れたものだということを秀も知っていた。
いつもならすぐ気配を察し振り返るはずの桜は、1本の薔薇を持ったまま振り向こうともしない。

「何やつてんだ、桜。」

秀は背後から彼女に声をかけ、その様子を見つめた。

白いドレスの上には。

血の染みが幾つも付いていた。

「何やつてんの！」

薔薇の棘を指で取つている事に気付いた秀は、彼女の手からそれを奪つた。

「ああ・・・・・・」

桜はふと、現実に戻つたかのよう、「秀。もうお茶の時間ね。」

「・・・・・つてか」

秀は目を細め、その両手の血を見つめた。

「何してたんだよ。」

「お部屋に薔薇を飾ろうつと思つて。」

「榊に頼べばいいだろ。それに、こんな指で棘取つてどうするんだ。」

お茶どころじゃないぞ。」

「そうね。」

桜は秀を見つめ微笑んだ。少し、表情が暗い。「今、ドレス着替えて来るから、リビングへ行つて、秀。榊もいるはずよ。」

そういうと、膝の上の薔薇を秀に渡し、彼女は自室へと向かった。

「・・・・・」

秀は目を細めた。

それから薔薇を持って、1階のリビングへと向かう。
そこには雑誌を読む榎の姿があった。

「榎。」

秀は彼の横顔に声をかけた。「あいつ……桜最近おかしくない
か?」

「満月が近づいているせいだろ。」

雑誌から目を離さず、榎は答えた。「満月近くになるといつもそ
うだ。

お嬢がお嬢でないみたいになる。」

「満月・・・・・・・・ね。」

ソファに座り、天井を見つめる。

(確かに桜だけど・・・・・・何か違う。)

そう想いを巡らしている時、階上からピンクのドレスに着替えた
桜が姿を現した。

「お待たせ。お茶にしましょ。」

につっこり、と微笑み、「榎は後で薔薇の棘をとつて頂戴。お部屋
に飾るの。」

「ほらよ。」

秀は薔薇の花束を榎に渡した。「お前の仕事だろ。」

「了解。」

榎は秀から薔薇の花束を受け取った。

1階のバルコニーからも青い空が見える。

夏の風がドアの開かれたバルコニーから室内に流れ込んで来る。

「桜。」

秀はソファから立ち上がり、「今日は俺が入れてやるよ。」
と、言いキッチンへ入った。

「あら。どうしたの?」

無邪気に桜が振り返る。その指には白いテープが巻いてあった。

「指。」

秀はそう言い、お湯を沸かし始めた。

「心配してくれてるの？秀。」

桜は嬉しそうだった。はしゃいだ声が背後から聞こえてくる。

「本当は」

秀は、「これも榊の『仕事』だろ。」

「でも、珍しいわね。私に優しい秀なんて始めて見たわ。」

桜は微笑んで言った。

「俺はブラックのキリマンしか飲まないから。」

「…………」

桜は目を見開き、ソファで雑誌を読んでいた榊は席を立った。無言で豆を挽き始める秀。

「お嬢。」

榊は桜の横に立つた。「気にするな。」

「…………貴方が全てを奪つたのよ、秀。」

ふいに、桜の雰囲気が変わった。

「何。」

秀は振り向いた。

そこには、確かにいつもの少女の桜。だが……『何か』が違っていた。

「…………」

秀は「コーヒー・メーカーから手を離し、彼女の前に立つた。

「一体、何が言いたい。」

そう秀が言つた刹那、

バツ・・・・・・

桜の右手が秀の首を掴んだ。

「つづ！」

突然の桜の行為に、「何すんだよ…」

秀は怒鳴った。

「お嬢！」

2人の間に、入るうとする榊を、桜は、

バツ・・・・・

左手に宿した紅の炎を彼の胸元めがけて放った。

そのまま数メートル離れた所にある棚に榊は叩きつけられた。

「お前、榊にまで何すんだ！」

とても少女とは思えない力で、秀の首を締めあげる桜。

「君が奪つたのだよ。」

「あなたが奪つたのよ。」

混じり合つ、青年と少女の声。

「あの日、君が桜の樹の下に来なければ、私は和人を手に入れる事が出来た。」

「和人・・・・・・・」

「私は貴方をずっと待つてたんだから。」

あどけない少女の瞳は・・・金色とビリジアン・ブルーを混ぜた
『闇色』の瞳。

「くつ・・・・・・！」

秀の首を締め付ける手に力がこもる。

「君さえいなれば。」

「貴方だけをずっと待つていたのに。」

「・・・・・・・」

（何て力だ・・・・・・・！）

秀は意識が薄れて行くのを感じた。

「お嬢！」

榊が飛びより、秀の首を締めあげる桜の手に自分の手をかけた。

バツ・・・・・

炎が・・・小さな炎がその手に進る。

ふいに。

桜の手が緩み、秀は床にしゃがみこみ、咳をした。
桜は倒れそうになる所を、榊の腕に支えられた。
その胸元で、

「あら、どうしたの？」

いつもの桜に戻った。

「どうしたの・・・・・って。」

秀は咳をこらえ、「お前今、俺を殺そうとしたんだぞ。おまけに
榊まで。」

「え？」

・覚えてないわ。」

「確かに、九桜を倒したのは和人の方だ。」

秀は言つた。「だが、それは九桜が『光^{ヒト}』をも制しようとしたか
らだ。当然。」

彼の台詞に、2人は目を見開いた。

「秀？」

小首を傾げる桜。「どうしてそれを？」

「どうしてつて・・・・・・・・・・・・」

秀は言葉に詰まつた。

今、『全』てが判つてしまつたから。

「・・・・・・・・・・・・榊。」

桜は榊を見上げて言つた。「何か、頭が痛いの。」

「『血^{エナジ}』の使い過ぎだよ。帝王のかけた結界の中にまた結界を張
つているから。」

「そう。」

「ベッドに運んであげるよ。」

神は桜を抱き上げ秀を返り見た。「お前も来いよ、秀。」「・・・・・」

歩き始めた神の後を無言で追いかける秀。

2階の一番奥にある桜の部屋で、

「ゆっくり休みな、お嬢。」

神がそう言つと、

「うん。でも」

ベッドに横になり、「神も秀も私の側にいてね。何処へも行かないでね。」

視線は特に秀へと向けられていた。

「ああ。」

秀は答えた。

その様子を見ると安心したかの様に、桜は深い眠りに就いた。

1・月夜(がつや) - 4(後書き)

続きを読む。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3136n/>

MOON-4 夜叉 4 <28>

2010年10月9日16時05分発行